

## 東西思想出合いの場を自己のうちに拓く II

授業科目名	東西思想出合いの場を自己のうちに拓く II	単位数 4 単位
英語標記	Western Theory of Passion and Mahayana Buddhism	
授業コード	360306	
受講人数	10 人	
担当教員	小林 恭	
対象	全研究科大学院生、3 年次以上の全学部生	
開講時間等	通年＝火曜 5 限（4 月 13 日～）	
開講場所	箕面キャンパス：外国語学部 講義室 A615	
キーワード	シモーヌ・ヴェイユ、宗教心の根源、キリスト教と仏教の対話。	
授業の目的	キリスト教と仏教の対話を可能にするような宗教の原点を探求した Simone Weil の思想から、宗教心というものの生じてくる源泉について主体的に自覚を深めてゆくこと。東洋の文化的伝統に在るわれわれが、われわれ自身の根源からの呼びかけをヴェイユをとおして聴きとめてゆくこと。 ※旧大阪外国語大学の授業科目「比較思想演習 III」と合同で開講される。	
講義内容	Simone Weil の論文「はっきり意識されない神への愛の諸形態」を読みながら、つねに大乘仏教との対応を念頭におきながら解説しつつ、宗教というものがそこから生じてくる根源について主体的理解をうながす。 テキストは昨年度の続きから（171 頁、宗教的つとめへの愛という節から）であるが、昨年の授業を受講していないひとでもついてゆけるよう、随時昨年購読範囲での問題点も再確認しながら進める。	
教科書	Simone Weil の著作『神を待ちのぞむ』（ヴェーユ生誕 100 年記念版）（春秋社）、各自で購入。フランス語原文をも希望する人にはコピーを配布する。	
参考書	講義時に適宜紹介する。	
成績評価	平常点と適宜の課題。	

### 「共生」をうたう「争生」の時代

近年、共生という言葉が、自然環境・文化・経済・社会福祉等、多方面の領域を横断して脚光を浴びてきた。この関心の高まりは、いかにも非「共生」的な諸現象が顕著に意識されるようになった時代的背景を反映しているであろう。家庭内や学校における世代間の不信と葛藤から、ジェンダー間の相克、人種間差別、障害者や特定の罹病者への偏見、諸宗教の対立、政治的イデオロギーによる抗争、そして地球自然環境と人類との不調和に至るまで、共生(living together)どころか争生(living in battle)とでも呼ぶべき荒廃現象の噴出である。

この事態は、世界中が一つのシステムとして一体化し、一人一人の人間の存在がその中で限りなく拡散してゆきながら、その拡散が世界的なつながりであるかのごとく思われて、実際は文化の内実が喪失されてゆく、という現代のとどめがたい趨勢と比例しているようにみえる。

### 「内発的に変化してゆくが好かろう」

あらゆるものが結びつけられたシステムとして、世界が一つになる在り方そのものが、かえって対立を激しくしているのが現状である。世界を計る原理が、経済効率的なものに単一化して競争は激化し、同時に、単一原理によって覆われてしまった文化の異質性は野性的な力で噴出し、民族紛争などは激しくなる。そこでどうすればよいのか。

「漱石ならば現在の窮状のなかで、明治四十四年のこの言葉を繰り返すだろうと思います。ただ、より悲観的に、ますます名案なく、それだけにより真実味をこめて、『内発的に変化してゆくが好かろう』と繰り返すだろうと思います。そこには、どうにもならないということと、それにもかかわらず、道があるとすればここにしかないという、より切迫した響きがこめられてくるでしょう。」「この道は最後まで残ると思います。ですから、もしまだ道があるとすれば、個人が自覚して自分で内から変わっていくことだと思います。それを否定すれば、おそらくもう道はなくなるでしょう。」と上田閑照は残された道の可能性を表現している。

### 内発的变化から真の共生へ

他の文化的伝統に対して開かれた敬意をもって接することができるためには、先ずその対話が自己の内部ではじめられ、私たち一人ひとりが内なる平和を実現することなくしては、他者や世界との平和的關係は実現できないであろう。この授業は、異なる伝統を各自が主体的に学ぶことをつうじて、先ず自己における内発的变化と成熟を期するものである。